英知通信

発行
英知大学
兵庫県尼崎市若王寺
2—18—1（〒661）
℡（06）491—5083
編集
英知大学広報室

昭和63年4月30日 英知大学 No.54

卒業式式辞
生涯学習者を目指して生きよう

学長 井上博嗣

実社会への門出を祝して

本日ここに英知大学第二十二回卒業式を挙行するにあたり、この日を最後に母校を去ってゆかれる皆様がたの晴の門出を祝福し、式辞を述べさせて頂きますことは、私にとりまして大きなよろこびであります。卒業生の皆様、ご卒業おめでとう。ご父兄の皆様がた、ご令息、ご令嬢のすがすがしい門出を心よりおよろこび申しあげます。

卒業生の皆様がたにとりまして、本日はまさに実社会への船出のときであります。卒業式のことを英語では「コメンスメント」と言われますが、「コメンスメント」とは「開始」ということを表わしております。皆様がたにとって、先生がたの講義を聞き、ノートをとり、読書に励み、予習や復習を重ね、ゼミナールではみずからの見解をまとめて発表し、レポートや論文を作成するといった類の学習は、今日この日をもって一応終止符を打ちました。けれども、本学で習得したさまざまな知識や教養を基礎として、生涯を通じて体験的にかつ主体的に学ぶ総合的な学習は、いよいよ今日この日から本格的に始まったわけであります。そこで私は、皆様がたの人生が実りゆたかなものであることを請い願い、本日この機会に「生涯学習者を目指して生きよう！」という決意を抱いて頂きたいと願ってやまないのであります。今日この日から生涯の最後の日に至るまで倦まずたゆまず学習を続けてゆかれることの重要性を私は皆様がたに強く訴えたいのであります。

自己完成に向かって

申すまでもなく、人はそれぞれ異った環境のもとに、それぞれ異った能力や性格をもって生まれてまいりました。したがって、人はまたそれぞれ異った完全性のレベルに到達し、自分なりにふさわしい実を結ぶことによって神に栄光を帰し、かつ人びとに恩恵をもたらすように召されているということができます。自分に与えられたタレントがどれだけであったかということが問題ではなく、むしろそのタレントをどのように用いて「私」という一個の小宇宙を完成させるべく努力したかということが重要な問題なのであり、まさにそこにおいてこそ私たちにたいする神のみ心があることを忘れてはなりません。「あなたがたの天の父が完全であるように、あなたがたも完全なものになりなさい」（マタイ5の48）というキリストのみ言葉がありますが、自分自身のなかに秘められている、あらゆる可能性を生涯をかけてギリギリの限界まで発揮し尽し、もうこれ以上完成されることがあり得ないという時点においてこの世に別れを告げ、神のみ国に迎え入れて頂かなくてはならないのであります。

こんにち日本人の平均寿命は男が七十四才、女が八十才となり、ありがたいことに日本はじつに世界一の長寿国となりました。皆様がたにとって、今や人生のわずか四分の一が終ったのにしか過ぎず、まだあと四分の三がとり残されているではありませんか。まさに、これからこそ可能性の追求が無限に可能なのであり、最高学府での教育を終えられた今こそが生涯学習への新たな出発点であると言えるのではないでしょうか。今日この日から十年、二十年たち、やがて三十年、そして五十年たって、ふたたび旧交をあたためるような集いがあるとするならば、皆様がたは人間としてのそれぞれ異った完全性を身につけた人になっておられることに気付き、その時点に至るまで払って来たひとつひとつの努力の積み重ねの尊さを、あらためて認識させられるに相違ありません。そもそも「成長する」ということそれ自体、生きとし生きる生命の持主であることのしるしであり、証しなのであり、「生きる」ということは、とりも直さず、人間として成長し続けるということであり、「よく生きる」ということは、すなわち全人的に円熟するということである筈であります。ただ、いたずらに年をとったからと言って、人は必ずしも人間として円熟するとは限りません。それどころか逆に、これまでその人のうちに秘められていた幼児性が年とともに顕著に現れ、ますます自己中心的になり、他人の言葉に最後まで耳を傾けるだけの心の余裕を失い、やがてその人の存在そのものが、まわりの人びとにとって重荷とさえなることがあることを思いめぐらすとき、日々みずから心掛けと成長するのでなければ、いつのまにかかえって幼児期の段階に後退していると言ってよいでありましょう。

人生のすべてが学習課題

「生涯学習者となろう」——このように申しますと、皆様がたは、「それでは、これからいったい何を学習すべきなのでしょうか？」とお尋ねになるかもしれません。それにたいする答えは一言に尽きます。「人生のあらゆることが学習課題である」と私は申しあげたいのであります。学問、芸術は言うに及ばず、社会情勢の目覚しい変化のなかで、どのようにして自分を対処させてゆくべきか、また、すべての人びとと実りゆたかな人間関係を結ぶにはどうすればよいのか。また、さまざまな価値観が錯綜するなかで、どのようにして自分自身の価値観を確立してゆくべきか、さらにまた、どのようにして実人生の深い意味を見出してゆくことができるか——これらすべてが生涯学習の永遠の課題であるということができます。学習は決してこれで十分というものではなく、涯しなく続けられてゆくべき性格のものであります。

今、試みに皆様がたが、これまで習得されてきた語学をひとつ取りあげてみてください。英語ならば、中学・高校・大学とじつに八年間学

習して来られました。けれども、明日から始まる皆様がたの職場に外国からのお客様をお迎えすることになったとすれば、どのくらいの方がたが現場へ案内し英語でわかりやすく説明することができるでしょうか。また科学技術の進歩や国際関係の緊密化など社会情勢の急激な変化に伴い、それに結構対応し得るだけの新しい学習が、矢継早に要求されるようになって来ていることに注目してください。理工学系の学部の卒業生を例にとるならば、四カ年間大学で学んだ教科内容は、社会人となったその日から、すでに時代遅れという印象さえ与えるほど科学技術の分野は日進月歩の進歩を示しており、すべてをもう一度学習し直さなくてはならないという事態は決して過言ではありません。今や半導体レーザーの光が世界を結び、人間の身体の内部をまのあたり見ることができる内視鏡が開発され、航空力学を応用して空気でもって布を織ることさえ現実に可能となって来ております。新しい研究開発が実を結び、ひとたび陽の目を見ますと、たちどころに新しい職種が生まれ、それにつれてこれまで市場で圧倒的な勢力を振っていた職種がにわかに衰えを見せ、やがて姿を消してゆくことさえめずらしくなくなりました。したがって、人は八十年の生涯において、たとえ自分の専門職とするところを三、四回変えることを余儀なくされても、その都度、結構自分自身の特性を生かしながら身辺の情況の変化にたいして、柔軟に対応しうるだけの能力をつねに身につけておかなくてはなりません。そのためにこそ、何事をも積極的に学びとり、自分の殻を破ることに苦痛を感じながらも、自己完成を目指して日々成長し続けてゆかなくてはならないのです。

価値観の混乱のなかに

あと十二年たちますと、二十一世紀を迎えるようになります。その頃には皆様がたは三十代の中葉、まさに活力あふれる壮年の盛りに達しておられ、組織を支える原動力として社会の第一線に立ち、あるいは家庭を支える強い柱として、自分自身を律するにとどまらず、まわりの人びとにすぐれたリーダーシップを発揮しながら、皆とともに歩むことのできる有為な器であることが当然期待されております。万が一、皆さんがたがその期待に十分こたえることができないとするならば、「何のために大学で学び、大学を卒業したのか？」と後指を指されても、何とも返しようがありません。そのときまでに皆様がたは自分なりのしっかりとした価値観をすでに身につけておられることでしょう。けれども、人は十人十色それぞれ異った価値観を持っており、自分自身が身につけて来た価値観だけで必らずしも、あらゆる問題が容易に解決することができるとは限らないということを、あらためて痛感させられることでしょうし、また同じ舞台の上で価値観を異にする人びとと一緒にそれぞれ自分自身の役割りを演じながらも、全体としてどのようにすれば、ひとつのまとまった成果をあげることができるであろうかと苦慮されるに相違ありません。また社会情勢の変化に伴い、人びとの価値観が動揺してゆくことに促されて、これまでの自分を支えて来た価値観を再構築し直さなければ、もはや時代とともに生きてゆくことさえできなくなってしまわないとも限りません。現代はまさに価値観の多様性というよりは、むしろ価値観の混乱の時代であると言う方がはるかに的確であります。したがって、的確な判断とともにつねに新しいものにたいするチャレンジ精神を持ち、多種多様な価値観を吟味、識別し、見解や立場を異にする人たちと胸襟を開いて語りあい、それらの人たち一人ひとりが抱える問題を理解するとともに、ひとりでも多くの人たちと共感することによって日々新たにして有意義な生活体験を積み重ね、円熟し切った人となるべく生涯学習者であるように心掛けて頂きたいのです。

燃え尽した人生を！

私の恩師で晩年は関西学院大学の理事長をはじめ、その他の大学でも重要な役職を果たされた故加藤秀次郎先生は、すぐれた生涯学習者であり、また卓越した生涯教育者でもあらせられました。十年前、先生がご帰天されて数カ月がたった頃、私が先生のお宅を訪問させて頂きましたところ、奥様が丁重に私を迎えてくださいました。そして「ぜひお見せしたいものがございます」とおっしゃって、先生の書斎に通して頂いたのであります。先生が愛用された机の上にはビニールが張ってあり、その下に開かれたままの書物や書きさしの原稿用紙やペンがそのままおいてあるのに気がつきました。「主人は亡くなる前の晩までこのようにして勉強しておりました。学者であり、教育者でもあった主人をしのび、机の上をそのときのままの状態で、いつまでも保存しておきたいと存じております」とおっしゃった奥様の言葉に私は深い感動を覚えました。そこに燃え尽した人生の証しがあったからです。人間の死にざまがそのままその人の生きざまを反映しております。実りゆたかな人生を生きるためには、真理の大海を目の前にして自分自身がいつまでも無知であり、不案内な初心者であって、人生の後輩からも腰を低くして学ばせて頂かなくてはならない一介の求道者にしか過ぎないことを謙虚に認め、平凡ながらも非凡なる生涯学習者であることを心掛け、日々学ぶことによってつねに成長することによろこびを見出してください。

皆様がたの行く手に神の祝福がゆたかにありますことを祈りながら、私の式辞とさせて頂きます。

希望に輝き新しい船出

第二十二回卒業式

午前十時から本学講堂で第二十二回卒業証書授与式が挙行され、神学科七名、英語英文学科一三三名、西語西文学科四四名、仏語仏文学科三三名、計二一七名が社会人として巣立っていった。

式はまずメルオー教授の電子オルガンの前奏で始まり、井上学長から卒業生一人ひとりに卒業証書が授与された。学長式辞（別掲）のあと、来賓の同窓会長福原宏章氏より祝辞（別掲）が述べられた。

次いで在学生代表黒川隆文君から先輩のご卒業をお祝いすると共に、今後も私たちの良き指導者、助言者として援助願いたいとの送辞が述べられた。

卒業生代表廣田滋君から教職員の皆様や親の深い理解と愛情を感謝し、卒業後も本学の建学の精神を忘れず、精一杯努力していきたいとの力強い決意が述べられた。

式後、卒業生はクラブの後輩から花束を受け祝福され、別れを惜しみながら、それぞれ新たな希望に燃え力強く巣立っていった。この日午後六時から大阪ヒルトン・インターナショナルで全学科合同の謝恩会が開かれた。

なお、本年度の受賞者は次の通りであった。

学科賞

神学科　小林純子

英語英文学科　長尾光則

同右　泉智子

同右　岡田真弓

西語西文学科　周有美

大阪大司教賞　比企潔

神学科　植木佳奈子

イスパニア大使賞　港谷佳世

同右　東森俊博

同右　寺本あけみ

同窓会学術奨励賞

同窓会長祝辞

会長　福原宏章

卒業生の皆様、本日はおめでとうございます。ご父兄の皆様にもお喜びを申し上げます。この良き日に、英知大学同窓会を代表して、皆様方に祝辞を述べさせていただけますことを大変うれしく存じます。私は英

文科の第一回卒業生で、現在四十四才です。皆様のご年令が二十二才であるならば、ちょうど皆様の二倍の人生経験を歩んだことになります。皆様がうぶ声を上げられた頃に私がこの大学を巣立ち、実社会に入ったことになります。その頃の大学はこのように設備も充実していませんでしたし、学生の数も少なくアットホーム的な雰囲気の中で、一つ一つをゼロの中から築き上げるよう努力致しましたが、それらを皆様や、皆様の先輩達が育て上げ、すばらしい伝統として今の英知大学にして下さったことに感謝申し上げる次第です。既に約三、七〇〇名という方達がこの英知を卒業され、各方面でご活躍されています。私も仕事柄、いろいろな業種の方と、いろいろな地域で接する事が多い訳ですが、そこで「英知大学出身です」と言って下さる人、紹介される人とよく出会います。これは大変うれしい事でして、話もはずみ、ビジネスの面でも私生活の面でもお互いによく理解しあい、この人のためなら、とお互い助けあい、全てがうまく運んでゆきます。この「英知大学」というキズナが、この世界の中で大きくネットされ、神様が絶えずうまく結びつけて下さっているのです。皆様も、この「ご縁」というものをどうぞ大切にしていって下さい。

さて、私がシカゴのメルビン・エバンズ博士から教わったことを、今日は皆様にお伝え致しましょう。それは、次のような幸福の四つの条件がバランスよくとれている事が大切であるということです。それは、第一に天職と呼べるやりがいのある仕事を持つこと。第二に、夫婦を中心としたあたたかい家庭生活をもつこと。第三に、人間として生まれた自分をより成長させ、より高めてくれるような深く、興味のある趣味の生活。そして第四番目に、精神的な支えとなる偉大なものへの信仰生活です。人間の不幸は、これらのバランスがくずれた時、フイに起きて来ます。従って、日常の生活の中に、身体的にも、精神的にも安定し調和のとれた生活をすることに心がけることが大切です。

毎日毎日を無事で過ごすことが出来るすばらしさ、家族が毎日元気であることのすばらしさ、出あいのあるすばらしさ、四季のあるすばらしさ、そして、これらのことに日々感謝する心が一番すばらしいことではないでしょうか。感謝の気持ちを養うには、自分が己の力で生きているのではなく、大いなるものの力によって、生かされ、生きているという自覚が大切です。感謝とは何か、「それは何事にも喜べる心」だと思います。そういう感謝の心がありさえすれば、「こんなことではもったいない、もっと努力をしなければいけない」という反省が生まれます。意識が変れば行動が変る。行動が変れば習慣が変る。習慣が変れば性格が変る。性格が変れば運命が変る。運命が変れば人生が変る。こういう長いプロセスを経て人生が変るのであって、それを支えるのが感謝、反省、成長という善性循環です。感謝と反省の心、これは本来、人間に備わっているものですが、うっかりするとにぶってしまったり、錆ついてしまったりしてしまいます。神様はその気持ちをたえず磨き、みずみずしく保つよういつも見守って下さっています。人生は山あり、谷ありのきびしい道程です。皆様への花むけのことばとして、次の六つの要素を投げかけさせていただきます。

一、苦労しているか。二、勤勉であるか。三、持続しているか。四、知恵を出しているか。五、勇気を出しているか。六、明るさを持っているか。苦労、勤勉、持続、知恵、勇気、明るさ。この六つはすべて後天的なものばかりです。人生を勝ちぬけるかどうかは誰のせいでもない。自分自身の努力にかかっているのだということをご理解下さい。ナマイキなことを申し上げたようですが、これから実社会に巣立たれる皆様と英知大学同窓会の同じメンバーとして、ご一緒に生き甲斐のある人生を送ってゆきましょう。皆様方のご健康とご多幸をお祈りして、私の祝辞と致します。ご静聴ありがとうございました。

カウンセリングルームだより

六十二年度において、別表の通り多数の方々が来室されました。学内だけで七十九件にのぼり、相談内容も多岐にわたっています。悩み少なくして生きていくことにしたことはないのですが、ある意味では、生きていくえで悩みは不可欠とも言えます。何か問題を抱えた時、当室を遠慮なく訪れてみてください。

また職業指導の点から、職業興味検査に加え、職業適性検査も今年度から備えておりますので、気楽にお申し出ください。

昭和62年度来談件数集計表　［年間］

内容概略	相談者	学内［件］	学外［件］	内容別件数［件］
修学，教育相談	学業，学校生活	9	4	13
	休・退学，登校拒否	2	8	10
	課外活動	0	0	0
	その他（母親カウンセリング）	2	13	15
進路，職業相談	適性（含　テスト）	20	3	23
	カウンセリング研修希望（含　テスト）	2	2	4
適応相談	パーソナリティ（含　テスト）	12	6	18
	対人関係	5	6	11
	家庭，家族	4	10	14
	恋愛，性	4	3	7
	その他（間接者相談）	3	4	7
健康相談	身体	2	3	5
	精神	14	2	16
延べ件数［件］		79	64	143
総時間数［時間］		177	218	395

総／143件，395時間．　昭和63年3月22日

英知大学カウンセリングルーム調べ．

第八回国際中世哲学会議に参加して

教養課程講師　ヴィセンテ・アリバス

昨年八月二十四日から二十九日まで、ヨーロッパの異常な暑さから避難するかのように、北国フィンランドの首都にあるヘルシンキ大学で第八回国際哲学会議が開かれました。

五年毎に開かれるこの会議の重要性は、全世界の有名大学を代表する三百人ほどの専門家が集まり、六日間にわたって語り合うことができるということです。また、そこで様々な国で行われた最近五ヵ年の研究成果が発表され、報告されることです。

今回の会議の中心テーマは、「中世哲学における科学と科学的知識」でありました。このテーマが選ばれた理由は、現代科学と技術の起源となる中世思想の分岐点の意味を解明することです。

ヨーロッパの思想のみならず、イスラム、ユダヤ、ビザンチンの文化という様々な観点から会議のプログラムが用意されました。四つの基調演説、七つの特別講演、そして会員メンバーによる百八十の個別発表の中でこれらが取り上げられました。数々あるテーマの中でも、特筆すべきは、ローマ大学教授トゥリオ・グレゴリーの「中世文化における知識の種類と知識の理想」であり、グイ・ボジュアンの「中世の進歩概念の出現」でした。後者は、特別講演で非常に興味深い。

公用語は、フランス語、英語、イタリア語、スペイン語、ドイツ語で、発表はこのいずれかでされます。今回は、ほとんどフランス語と英語でされました。最終日に総会があり、新会長及び新役員が選出されました。任期は五年。

近年中世哲学への関心は、ますます大きくなっています。現代科学と技術の限界が見えてくるにしたがって、世界をより総合的に把握するための新たな観点を他の時代に求める気運があります。中世時代の研究を復興することが、そのための大きな役割を果たします。

リサさんを迎えて

昭和六十一年度のメアリー・スー・ベッシェンさんに引き続き、昭和六十二年度は昨年五月にアメリカの姉妹校、ローラス大学を卒業したばかりの、リサ・アン・ウィスリー(Lisa Ann Wiesley)さんを本学アシスタント教員として迎えている。

彼女は、学生達と年令的にも近く、学生達も彼女とすぐ打ち解け、今ではまるで自分のクラスメートのように接している。

現在、彼女は本学の卒業生の家庭でのホームスティ生活を楽しんでいる。日本語の勉強も熱心で週に二回、本学の元英語英文学科教授、佐伯わか子先生の指導を受け、また週一回、本学の学生にも勉強を見てもらっている。生きた日本語を勉強するため、実地勉強もかかさない。

先日もこんな話をきいた。一人でタクシーに乗り家に帰る時、運転手にどう説明するか考えた末、日本語の授業で習った「はさむ」という言葉を思い出し、「香炉園と打出、はさみます」と言い、それで充分意志が通じ、家まで帰ることができたというものである。ちなみに、ホームスティ先は西宮の香炉園と打出の中間地点にある。

「習った言葉をすぐ使う」。この実践の成果であろう、彼女の日本語は日に日に上手になっている。これは逆に、英語を学ぶ上でも大切なことである。彼女は習った日本語を駆使し、近郊はもちろん、東京・広島・九州と旅もしてきた。彼女の学ぶことに対する意欲と実践は、我々も見習うべきであろう。

この彼女の意欲と実践は、授業にも反映している。できるだけ学生達が英語を話せる雰囲気をつくるべく努力している。それが実っているためであろうか、昼下がりの英語教室からよく楽しそうな笑い声が響く。授業が終って出てくる学生達は皆、まだリサさんと話し足りなさそうにしている。この春休みも昨年のように英語教室を開くことになり、希望者を募ったところ約四十名の学生が集まった。彼らは国際交流委員会で作成した時間割に沿って、週一、二回授業を受ける。春休みも後半に入った現在でも評判を聞いて追加申し込みをしに来る学生が後をたたない。

このように、学生の意欲をもり上げたリサさんの日本滞在も残り約四カ月を余すのみとなった。残りの期間で英語教室からもれる楽しそうな笑い声が一段とこだまするよう願ってやまない。

(国際交流委員会　楠川知子　記)

図書館増築竣工

四月十四日、図書館新書庫の祝別式が井上学長の司式によって行われ、式後岸常務理事より工事関係者に対して感謝状が贈られ、新書庫の完成を祝った。

今回完成した書庫は図書館西側に接続して鉄筋四階建の三角屋根のしゃれた建物で、内部は一層が電動書架、二・三層と四・五層が積層書架という構造になっている。今回は、二・三層の積層書架を設置して約五・五万冊の収納スペースを確保した。今後、一層および四・五層に書架を増設することにより、現書庫の倍の収納が可能となり、約三十万冊の蔵書をもつことができる。

新書庫の延床面積は五九一・五六m^2、そのうち二階部分二二一m^2に八十五m^2の事務室と一三六m^2の書庫二層を今回使用することになる。

(図書館次長　越知昌夫　記)

入学試験結果

—昭和六十三年度—

昭和六十三年度の入学試験は推薦入試を十一月十九・二十日に、一般入試については一次を二月九日、二次を三月八日に行い入試結果は別表の通りで、最終的に英語英文学科一五九名、西語西文学科五十三名、仏語仏文学科五十五名、神学科十一名、および編入一名を含めて計二七九名が入学しました。

本年度の志願者は一六三〇名と更に大巾にふえ、倍率も一般一次で、英語英文学科五・三倍、西語西文学科三・七倍、仏語仏文学科五・〇倍、神学科一・八倍となりました。

(教務課長　幸田健造　記)

昭和63年度入学試験状況

倍率：受験者数/合格者数　( )内 女子内数

	募集人員	志願者 推薦	志願者 一般次1	志願者 一般次2	志願者 計	受験者 推薦	受験者 一般次1	受験者 一般次2	受験者 計	合格者 推薦	合格者 一般次1	合格者 一般次2	合格者 計	倍率 推薦	倍率 一般次1	倍率 一般次2
英語英文学科	150	213 (65)	559 (174)	316 (100)	1,088 (339)	211 (64)	526 (159)	289 (96)	1,026 (319)	75 (36)	99 (60)	70 (34)	244 (130)	2.8	5.3	4.1
イスパニア語イスパニア文学科	50	54 (14)	124 (36)	69 (17)	247 (67)	51 (12)	119 (33)	68 (16)	238 (61)	25 (11)	32 (15)	20 (7)	77 (33)	2.0	3.7	3.4
フランス語フランス文学科	50	48 (10)	159 (45)	72 (19)	279 (74)	46 (10)	150 (42)	66 (16)	262 (68)	26 (8)	30 (15)	17 (8)	73 (31)	1.8	5.0	3.9
神学科	10	4 (0)	7 (1)	5 (3)	16 (4)	4 (0)	7 (1)	5 (3)	16 (4)	4 (0)	4 (1)	4 (3)	12 (4)	1.0	1.8	1.3
合計	260	319 (89)	849 (256)	462 (139)	1,630 (484)	312 (86)	802 (235)	428 (131)	1,542 (452)	130 (55)	165 (91)	111 (52)	406 (198)			

人事

専任教員

退任（三月三十一日付）

教授（教養課程）　井野　敏夫

新任（四月一日付）

教授（教養課程）　壷内　弘吉

助教授（仏語仏文学科）　石黒・マリーローズ

講師（西語西文学科）　マリア・ルイサ・ロペス

講師（英語英文学科）　山根・キャサリン

昇格

教授（神学科）　松本　信愛

助教授（教養課程）　三浦　太郎

休職

講師（教養課程）　村田　稔

非常勤講師

神学科　フランク・J・アショー

英語英文学科　山田　国夫

同右　川上　文子

西語西文学科　マリアデル・ピラル

教養課程　保江　邦夫

同右　石垣　博子

海外研修

。六十二年九月一日から一カ年スペインへ

西語西文学科　山口　忠志

。六十三年四月十六日から一カ年フランスへ

仏語仏文学科　吉中　恒

研究室だより

英知大学論叢『サピエンチア』第二十二号掲載の研究論文

奥村和滋助教授

全人教育における知識の意味

——マックス・シェーラーの「調和の時代」にむけて——

三浦太郎講師

スルー社会のフラメンタドに関する一考察

西井克泰講師

依存性類型から見た高校生の心理的特性について

松本信愛助教授

人工授精および体外受精に関するバチカンの見解

中野正勝助教授

H. Mühlenの三位一体論についての批判的考察(2)

井上博嗣教授

Henry Thoreau の大地観

木鎌安雄教授

ノリッジのジュリアンの霊性(1)

「三つの賜物」について

J. L. Álvarez-Taladriz 教授

Apuntes sobre la Fusta del P. Gaspar Coelho, Viceprovincial de Japón

蔵本邦夫講師

江戸幕末・明治の『ドン・キホーテ』

J. S. Álvarez-Taladriz 講師

イスパニア音楽の特徴Ⅱ——ホタについて——

石野好一助教授

フランス語の接続表現と文連結の緊密性について

岡田彰子助教授

蕪村筆「奥の細道画巻」について